

# プロローグ

○一日目 午前六時三十分

「はあ……」

朝から眩い夏の日差しの中、東風谷早苗はやや不満そうに神社の裏庭で作業をしていた。地面のあちこちで引っくり返った大皿を拾い、そこから中に転がっていた一升瓶を拾い上げる。早苗が周りを見渡してみると、その様な惨状があちこちに広がっていた。朝っぱらからこれを一人で片付けるのだから、溜め息の一つや二つは出てしまう。

ここ最近では宴会ばかり行い、三日に一回には開かれていた。誰かが宴会をしようとする提案した訳ではなく、何となく三日置きに宴会が行われている。幹事は霧雨魔理沙が引き受けているが主催者ではなかった。早苗は気になって参加者に問いかけてみたが、誰一人として知っている者は居なかった。

人を集めるのは魔理沙が勝手にやってくれて、参加者は酒や食べ物を持ってきてくれるので経済的には楽が出来ていた。

早苗は最初にそう思っていたのだが、一週間に一度ぐらいのペースから徐々に短くなり、いつの間にかこんな状態が続いていた。

今年は異常なまでに長かった冬が終わり、幻想郷中は瞬く間に春の陽気に包まれると、皆花見が出来なかった鬱憤が溜まっていたのか、ここ博麗神社では（冬が長引く原因を作った犯人も交え）宴会三昧となっていた。

以前もそれなりの頻度で宴会が行われていたが、桜の花が散り始めると共に、少しずつ頻度が減っていく——はずだった。

梅雨が明ければ再び宴会が再開し、毎回と言っていいほど、早苗が起床した時には誰の姿もなく、起きた早苗を迎えてくれるのは無残にも散開しているゴミだけであった。

二日酔い気味のだるい体に鞭を打ちながら、早苗は片付けを続ける。

「……霊夢さんいつもこうやって一人で片付けてたのかな」

早苗がぼつりと呟く。霊夢とはもちろんこの博麗神社の主であり、幻想郷で最も重要な博麗の巫女である博麗霊夢の事だ。

本来はこれも霊夢の仕事であるが、今の幻想郷には霊夢は居ない。

正しくは存在すらないのだ。

早苗はこの時代の人間ではない。今より未来の幻想郷に居たのだが、いつの間にか過去の幻想郷に飛ばされて、空席だった博麗の巫女となり、博麗早苗として帰る方法を探しながら日々を過ごしている。

しかし、本来の時代に戻る方法についての手掛かりは全くと言っていいほど掴めていなかった。早苗の中で一番怪しいと思っていた人物、八雲紫と接触する事に成功したのだが、犯人ではなかった。

今の早苗の境遇を知る人物は八雲紫だけで、色々と相談が出来る唯一の人物である。

紫曰く、過去に飛ばされたのは間違いないのだが、ここは早苗が本来居た幻想郷という訳

ではなく、この世界に可能性の数だけ存在する別の幻想郷へ飛ばされてきたらしい。その証拠として霊夢が存在しないのだという。本当に同じ幻想郷ならば、ここにはちゃんと霊夢が存在してなければおかしいと言っていた。

つまり、早苗は時間を遡っただけではなく、数多の世界の中から霊夢が存在しない世界に飛ばされてきたのだ。

後者については紫の能力で別の平行世界へ移動する事は可能だが（それでも、ほぼ無限大にある幻想郷の中からピンポイントで探し当てるのは奇跡でも起きなければ不可能らしい）それに、さすがの紫でも時間軸を弄る事は出来なかった。

平行世界と時間軸、この二つを同時に越える力を持つ者は今の幻想郷には確認されておらず、早苗が居た時代にもそんな力を持つ者は居なかったはずだ。

現状ではかなり絶望的な状態ではあるが、一つの可能性としてこの時代の早苗がやって来るまで待つ、という選択肢も考えた。奇跡の力を使えない以上、こちら側の早苗に事情を説明し、その力に頼れば……もしかすると戻れる可能性もあるかもしれない。

自分でもかなり安直な考えだと思っていた。奇跡を起こす程度の力を使っていたから分かる事だが、起こす奇跡の大きさによってはそれ相応の力を必要とするのだ。

一人の人間を別の時空へ飛ばす。

もちろん試した事がある訳もなく、奇跡を起こす為の時間詠唱もどれだけ掛かるか分からないし、失敗する事だって十分にありうる。

最悪の場合、さらに変な所へ飛ばされる可能性もゼロではなく、半ば賭けに近いと早苗は思っていた。

と言つても、それまでに解決方法が出てくれば何も問題はないが、守矢神社が幻想郷にやつてくるはあと一年、そう遠くはない。

最初の頃は何度も挫けそうになったが、今ではすっかり博麗の巫女が板についてきてしまった。だからと言つて毎日だからだとしている訳ではないが……。

宴会の後片付けも半分ぐらいまで進み、早苗の体からジワジワと汗が染み出てきたその時であつた。

ガサツ!!

神社の向かい側に生い茂る草むらの中から、何か動く音がする。早苗は反射的にビクツとなりながら、音がする方へと振り向いた。

「にゃーん」

緊張が走る――が、鳴き声を聞いて一瞬で拍子が抜けてしまった。草むらから出てきたのは猫だった。それも真っ白い毛並みの猫だ。

青くて細い瞳をした白猫は草むらから出てきては早苗の顔をジツと見つめていた。一方の早苗はまず猫の尻尾に視線を向けた。長く垂れている尻尾は一本しかない。

「どうやら妖怪の類ではないようだ。これが二本あったりすれば即退治である。」

普通の野良猫のようだが、博麗神社で野良猫を見るのは初めてだった。幻想郷の野良猫なんていうのは、その大半が人里か、山に存在するマヨヒガと呼ばれる猫だけが住む里のどちらかにしか居ない。それ以外の場所で生き抜けるほど幻想郷の自然は甘くないようで、ほとんどが別の野生動物や妖怪の餌になってしまうのだ。

視線を猫の顔に戻すと、早苗はその場にしゃがみ込んで微笑みながら手の平を伸ばした。「おいでおいで」

白猫との距離は何歩か離れているが、猫は元々警戒心が強く、野良となれば尚更だ。一歩でも動いたらすぐに逃げ出してしまおうだろう。

猫は反射的に早苗の指先と顔を交互に見て、ぶいっと振り返ってしまった。

「あ……」

早苗が反射的に立ち上がって一歩踏み出そうとすると、白猫は一度だけ振り返る。しかし、再び草むらの中へと消えてしまった。

「あゝあゝ」

たまには普通の動物と戯れたかったと思った早苗だが、どうやらフラれてしまったようだ。早苗は少ししゅんとする。しかし、早苗はあの猫をどこかで見た事があったような気がしたが、あれだけ特徴的な白い猫を見ればそうそう忘れない。きっと気のせいだろうと思い、再び後片付けに戻るのであった。

掃除を終わらせた早苗は居間に戻ると、ドサッと倒れこむように畳の上に寝転がった。襖を全開に開き、外から流れてくる心地の良い風を家の中へと呼び込む。

「はあー、やっと終わったあ……」

朝から一仕事をこなし、再び横になった早苗はこのまま二度寝でもしようかと思ひ、体を横にして目を閉じる。

気鬱な梅雨も明けて、ここ最近はずいぶん晴天が毎日続いていた。天気が良い日が続くのも悪い事ではないのだが、そのせいで宴会が延々と続いている気もしている。

(次から誰か捕まえておこうかなあ)

妥当なのは魔理沙と妖夢だろうか？ と思う早苗だったが、宴会で最初に酔い潰れてしまふのは間違いない自分である。予め頼んでおいても目が覚めた時には居なくなっている可能性は大だ。

(せめて一週間に一回ぐらいならいいんだけど)

最近はずいぶんとやる気が起きず、修行の方もサボり気味であった。どんどんと霊夢と同じ様になってきてしまっている気もする。

ここらで大きな異変でも起きればやる気も出てくるものであるが、そう都合よく起きるものでもない。

ただ、一つだけ気になっている事があった。早苗はまだ重くない目を開いて、横になったまま外を眺める。空は抜けるような晴天、木々は深い緑に包まれ小鳥達のさえずりが聞こえ

てくる。極めて平和な風景であるように見えるが、少し感覚を研ぎ澄ますと辺りはうつつらと霧のようなものに包まれていた。

宴会が始まると妖気が強くなり、宴会が終わると霧散するように薄くなっていく。最初は強力な妖怪ばかりが神社にやってくるので、少しずつ妖気が溜まってしまったのかと思っていたが、ここ以外でも同じような妖気に包まれている事が最近分かった。

とはいえ、何かが起きる訳でもなく、誰かがそれについて言い出す事もなければ、調査をしている気配もなかった。

早苗もこの妖霧については気付かない振りをしつつ、参加者の動向を注視していたのだが、元々は大きな異変を起こした者達も居る為、逆に全員が全員怪しいと思ってしまう。

しかし、宴会の参加者の中に妖霧を発生させている犯人が居るのは間違いないと推測していた。

(よし……！)

そうと決まれば早速行動に移ろうと思ったのだが、ふと壁に掛かった時計に視線を運ぶと時刻は七時をちよつと過ぎたぐらいであった。

早苗はむくりと立ち上がり、大きな欠伸をかくとそのまま寝室へと向かって行った。

(昨日あんま寝てないし、お酒も抜けきってないみたいだから体調は万全にしておこう)  
自分にそう言い聞かせて、二度寝に戻る早苗なのであった。